

2026 年 8 月 9 日（日）永眠者記念主日朝礼拝説教

『死ぬことは利益』 井上隆晶牧師

フィリピ 1 章 21～24 節、マタイによる福音書 6 章 19～24 節

①【喜びの秘訣とは】

今年は戦後 81 年目を迎えます。8 月 6 日には広島に、9 日には長崎に原爆が落とされました。夏の一番暑い時です。どれほど苦しかったかと思います。戦争で亡くなった多くの人たちの犠牲によって今日の平和が与えられました。そのことを思うと、人は自分だけで生きているのではなく、時代を超えて多くの人と連帯して生きていることが分かります。そしてなぜ私ではなく彼らが犠牲になったのかと思うのです。私だったらその苦しみには耐えられていただろうかと思うのです。しかし今の世の中を見ると、人間は失敗から学ばず、多くの犠牲を無駄にして再び愚かな戦争を繰り返しています。人間はいくら平和を訴えても、学んでも無駄なのではないかと思ってしまいます。私たちはどこに希望をもって生きたら良いのでしょうか。今日読んだフィリピの信徒への手紙はパウロによってローマの獄中で書かれました。やがて彼は裁判を受け、死罪になることが分かっています。にもかかわらず「喜び」という言葉が 16 回も出て来るのです。彼はどのように喜ぶことができたのでしょうか。そこにこの世を希望をもって生きる秘密があるように思います。

②【キリストがすべてである】

パウロは「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」（フィリピ 1：21）と語ります。パウロにとってキリストが人生のすべてでした。そのことを彼は手紙の後の方で書いています。「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。」（フィリピ 3：8）彼は今までユダヤ教の律法を誇りとし、それを学び、実践することが人生のすべてでした。しかしキリストに出会い、彼を知るようになってからはキリストのあまりのすばらしさに夢中になり、今までやってきたことがあまりにも次元が低く、くだらないことに思え、キリストさえあれば十分とまで思うようになったのです。キリストが自分の人生のすべてになったのです。しかも彼は、死ぬことは利益だとまで言っています。普通は死ぬことによって利益などありません。すべてを失うのです。なぜ利益だと言うのかというと、この世ではキリストをおぼろに見ていますが、来世ではキリストの近くに行けるし、この目ではっきりと見、はっきりと知ることができるからです。

●有名な数学者、物理学者でパスカルという人がいます。彼は父の怪我をきっかけにして、「無くてならぬものは一つだけだ」（ルカ 10：42）というキリストの言

葉を聞いて、この世と神とに心を二つに分けることをすべて断念しようと決断します。「もはや神のため以外には生きまい、神以外のものを求めまい」と決心するのです。ところが頭では分かるのですが、心から神様を素直に信じることができません。そこで彼が取った手段は「信仰を理性から心に入り込ませる手段は、あたかも信じるかのように行い、聖水を取り、ミサを聴き、祈禱を唱えることである」というものでした。形から入ろうとしたのです。すると不思議なことが起こります。1654年11月23日の夜、彼は一種の恍惚状態に入り、神を体験します。パスカルはこのときの霊的経験を日記にメモしています。「**确实、确实。心からの歓喜。平和、歓喜。歓喜。歓喜。感動の涙。**」彼はキリストに出会ってから、数学と物理学を捨てて、神学者になりました。

「けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。」(フィリピ 1:21) 何という男でしょう。この世の人とはまったく違います。早く死んでキリストの所に行きたいと熱望しているのです。でもまだ地上で生きていれば、教会のために働くことができるので、死にたいという思いと、この世に残らなければならないという思いとの間で、板挟み状態だということです。人はよく「早く死にたい」と言いますが、それは病気で苦しい、生きることが辛い、独りぼっちで寂しいとかでこの世が嫌になったからです。パウロは違います。キリストに早く会いたい、キリストと共にいたいからです。

③【この世は人生の目的地ではない】

「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。」(フィリピ 1:20) パウロにとってこの世を生きる目的というのはキリストを証しし、キリストを宣べ伝えることにありました。これはパウロだけのものでしょうか。そうではありません。これは全キリスト教徒の使命でしょう。そのために私たちは創造され、この世に生まれ、選ばれ、信仰が与えられたのです。家をもったり、旅行に行ったり、美味しい物を食べたり、事業をしたり、趣味を行うためにこの世に生まれたものではありません。それは目的ではなく手段です。家は宣教した体を休めるため、旅行はリフレッシュしてまた宣教するため、おいしい食事も、体を元気にして祈禱し、宣教するためです。

●榎本保郎牧師がこんなことを書いていました。

「キリスト教信仰は…中心をはっきり知らなければならない。円の中心がわかれば、中心から円周への距離はみな同じである。焦点が二つあれば楕円形になってしまう。中心が一つであると、私だけは遠いとか、この問題は困ったことだとか

ということが、みな等距離になってくる。…中心さえわかったら、私たちは劣等感をいだいたり、また優越感を持ったりすることはなくなる。イエス・キリストという信仰とこの世と、二つの焦点を持っていると、楕円形のようになって、自分の優っている点では人に誇ってみたり、劣っている点では卑下してみたりするのである。」

彼の文章は少し分かりにくいと思いますが、分かりやすく説明するとういうことです。

円の中心（焦点）に「この世」を置くと、この世がすべてになり、この世が生きる目的になってしまいます。するとこの世で多く集めた人が幸せになるので、人はこの世を奪い合い、戦争が終わることはなくなります。この世が目的なら、重度の障害をもって生まれた子や、災害で若くして命を失った人は不幸になるでしょう。そしてこの世がすべてなら、他人と自分を比較して優越感や劣等感を持つようになり、他人の評価がすべてとなるのです。しかし円の中心（焦点）に「キリスト」を置くと物事が違って見えて来るのです。キリストは「神の国」そのものですから、神の国に行くことが生きる目的になります。この世は神の国に行くための手段になるのです。障害は、神の栄光が現れるため、病氣も神に近づくため、不幸も災害も、すべてはキリストへ到達するため、神の国へ行くための手段に過ぎなくなるのです。そして人にではなくキリストに認められることだけを喜びとするので、他人の評価は気にならなくなるのです。パウロの人生の中心は完全にキリストでした。この世は目的地ではなく、神の国が目的地でした。だからこそこの世で何かを失っても怖くなかったのです。人生の中心に何を据えるかによって、まったく変わってしまうのです。

先日、YWCAの季刊誌を読んでいて、平和運動や平和教育をすることは大切ですが、そんなに人間に期待して大丈夫だろうかと思いました。人間はいくら学んでも変わらず、人間の力では平和は出来ないと思ったからです。しかしもし、人間というものに絶望したら、キリストは十字架にかからなかったと思います。すべての人間を滅ぼし、新しい人間を創造した方が手っ取り早いからです。しかしキリストはそうされませんでした。人間の為に自らを犠牲にされました。それは人間を信じたからではないのでしょうか。確かに人間は罪を犯し、失敗をし、この世を破壊し、平和を作れません。しかしそれでも神と一体になった人間は罪から立ち直り、死を恐れずに悪と立ち向かい、天使のように生き、平和を作ることが出来るのです。善は本性ですが悪は習慣であって、悪よりも善の方が強のです。キリストの十字架と復活に焦点を置いてすべてを見るならば、私たちは希望を持つことができるのです。アウグスティヌスは「悪い時代だからこそ良く生きよう」といいました。まず小さな平和を作りましょう。悪に負けないで善をもって返しましょう。希望をもってこの世を生きたいと思います。